

随想

人生意気に感ず

佐伯史談会長 高木嘉吉

(佐伯市藤原)

標題を見て、私が意気に感じてハッスルしていると思
う方があるかもしれないが、そうではない。この稿では、
この起源について鮮明しようとするものである。

閑を得て少しづつ、『史書』を読んでいるが、唐代を讀
むに当って『唐詩選』を手許に置いてある。之は『漢籍
国字解全書』十巻の内の一冊である。同書は昭和三年一
月十日発行となっているので、その頃購入したものであ
らう。久しくつんどくの悲運をかこっていたが、五十余
年たつて、やっと日の目を見たわけである。

『唐詩選』の最初に載っているのは、魏徴ぎちやうの述懐じゆつかいであ
る。魏徴は唐の高祖・太宗二代に仕えた文官で、当時の
すぐれた文学者であった。

述懐は、中原還逐鹿また(中原 鹿を逐おふ)にはじま
って、人生感意気 功名誰復論(人生意気に感ず 功名

誰か復論またせん)で終っている。二つともよく人々の口に
する句である。

此の詩の生れた背景は、太宗が高祖のあとをついで、
唐の第二代の皇帝となった時、太宗の兄の建成の家来達
が、建成を擁立しようとして騒動した。そこで太宗は魏
徴にこれを取鎮めることを命じた。魏徴は太宗の知遇に
感じて、函谷関を出て勇躍して建成の所に赴くのである
が、その時その心境を述べたのがこの詩である。

余白があるので、大体を記してみよう。

投筆事戒軒しやうけん(筆を投じて戒軒を事とす)後漢の班超に
ならつて文官をやめて、武官として出で立とう。

從横計不就はちやくと(從横の計 就らざれども)昔、蘇秦張儀
が、弁舌をもって事を成した。自分もそうやってみ
ようと思うが、うまく行くかどうか分らない。

慷慨志猶存（慷慨の志 猶 存す）天子の命にしたが

って、事を成さうとする志に燃へている。

伏策謁天子（策を仗いて、天子に謁し）天子へ御暇乞
いに上り、お目にかかつて、我が家に帰らずに出で
ゆく。

馭馬出関門（馬を駆せて、関門を出づ）函谷関を出て
行く。

請纒繫南粵（纒を下東藩（纒を請うて南粵を繋ぎ 軾
に憑って東藩を下す）終軍や酈生が弁舌一つで事を
成したように、自分もしたいと思う。

鬱紆陟高岫（鬱紆として、高岫に陟り、
出没して平原を望む）行く道中の様子を述べたもの
である。草木の茂った高い山などを通り、谷合に出
たり、平地を望み見たりして行く。

古木鳴寒鳥（空山啼野猿（古木に寒鳥鳴き、空山に野
猿啼く）

既傷千里目（既に千里の目を傷ましむ）高い山に上り
見望んでは、故郷も遠くなったと心を傷ませる。

還驚九折魂（還って驚かす 九折の魂）九折は至極の
難所、踏みはづして落ちはしまいかときも魂をつぶ

すような所を、せつせつ（たびたび）通る。

豈不憚艱險、深懷國士恩（豈艱險を憚らざらんや、深
く國志の恩を懷う）艱險を恐るるのは同じであるが、
人多き中に我を器量者だ国士だと思し召さるる御恩
捨て難く、今この艱難を恐れ憚らずに行く。

季布無二諾（季布二諾無く）季布は人名、一諾を重ん
じた人。

侯嬴重一言（侯嬴一言を重んず）侯嬴が一言を重んじ
て、身易りに立ったように、自分もちつとも引かず
に出で立つ。

詩の解釈は終ったが、お前はどうかと内省する。率直
に言って、今私は史談会の会員の意気を感じて立ってい
る。長い間私を支持し、共に温故知新の道を歩いた会員
の皆さんに、何か報いたいものと驚馬に鞭打っている次
第である。

